

書評

日本パンダ保護協会監修
『パンダが日本にやってきた！来日 50 周年メモリアル』

(朝日新聞出版、2022 年 10 月)

酒 井 宏 平

先日、初めての上野動物園で、最初に見た動物がパンダだった。特に理由があったわけではなく、無意識にパンダの列を進んでいた。20分待ちの行列でワクワク過ごしながら、ふとこう思った。「なぜ、パンダなのか?」。僕もその1人であるが、パンダをひと目見ようと、こんなにも多くの人が並んでいるのだ。

上野動物園といえば、パンダというイメージが強い。一方で、上野動物園とパンダの関係についてはほとんど知らない。そもそも上野動物園とパンダにはどんな繋がりがあるのか? そんな疑問を持った人に、この本はおすすめだ。

この本は、今から50年前、日中友好を記念して上野動物園にやってきた2匹のパンダ、カンカンとランランの到着から始まる。当時の新聞記事を振り返りながら、現在のシャンシャン、シャオシャオ、レイレイまでの全15匹のパンダをめぐるさまざまな興奮や苦労を知ることができる。上野にパンダがやってくる第1章、白浜と神戸のパンダの第2章、上野パンダの今を紹介する第3章の3つの構成。ところどころに、パンダ飼育担当者やファンのパンダ愛に溢れたコラムがあるから、新聞記事という堅苦しさがなく、読みやすい。まさに、上野パンダの最新版入門書だ。

検疫、公開、食事、病気、繁殖、子育て、どれ一つとっても、そこには苦労話や面白話などストーリーがある。特に、井の頭自然文化園園長などを歴任した成島悦雄さんの「私のパンダヒストリー イメージ先行で始まったパンダ飼育」では、獣医として上野動物園で働いていた成島さんの、当事者として奮闘しながらも、どことなく客観的にパンダブームを見ていた様子がよくわかり興味深い。インターネットもなく、誰もパンダという生き物を知らない時代。数少ないパンダの情報を『Men and Pandas』という英語文献を翻訳し情報収集したものの、上野パンダの受



け入れ担当の間でも、パンダの可愛さや人懐っこさなどの「イメージが先行する状態だった」ことが紹介されている。しかし、実際にやってきたパンダの大きさに驚いたのだとか。百聞は一見にしかずということか。パンダという特殊な話でありながらも、この本で紹介される一つ一つの話は決して特殊すぎる話ではない。ペットを飼っていた経験がある僕にとって、うんうんと思える共感話が満載だ。

夜間観察の仕事では、来園者は長時間並んでもわずかな時間しかパンダが見られないにも関わらず、「5分ごとに行動をチェックするという貴重な機会」を得ていた成島さん。「だれにも邪魔されず一晩貸切でパンダを観察できるのは役得以外にありません」と述べる一方で、夜間観察明けに見た正門の長蛇の列を見て、ようやく「パンダ人気に驚いた」と実感する様子が伝わってくる。思わず、その長蛇の列は、あなたが関わっているパンダを見に来ている人たちですよ！と もっと強く教えたくてしまう。

どんな名もなき生き物であっても、必ずストーリーを持っている。この本は、それが、人間であっても、パンダであっても、ストーリーがあることを教えてくれる。僕は事前にパンダについて調べずに上野動物園に行ったため、そこで見たパンダは、白と黒の模様がついた生き物に過ぎず、僕はただの来園者の1人に過ぎなかった。しかし、この本を読むにつれて、レイレイはマイペース、シャオシャオは好奇心旺盛など、パンダそれぞれの顔がよく見えるようになった。ただの白と黒の模様の生き物ではない。パンダ一人一人に思いの詰まったストーリーがあるのだ。それを読んでいるだけなのに、ただの来園者だった僕が、パンダ一人一人に思いを馳せてしまえるのだから、改めてパンダをめぐるさまざまな興奮や苦労のすごさを痛感する。

この本で紹介されるどのストーリーからも、パンダへの、そしてパンダからの全力の愛が溢れているを感じさせてくれる。東日本大震災、新型コロナウイルスの感染拡大など、いつの時代も暗い出来事がある。だからこそ、「動物の持つ力を信じて、楽しかった思い出を心に刻める場所でありたい」という福田上野動物園園長の言葉に、思わず心が震え、目頭が熱くなる。白と黒のパンダカラーの表紙デザインも可愛く部屋に飾ると映えること間違いなし。カラー写真も充実しているので、文字ばかりでなく飽きずに読めるのも嬉しい。上野パンダはこれからも日本中に愛を届けてくれることでしょう。